

女三の宮と薫——〈母〉と〈女〉をつなぐ糸

櫻井清華

はじめに

薫は道心を志向する青年として語られる。そして道心が薫と宇治の八の宮を結びつけ、ひいては宇治の大君、中君、そして浮舟へと薫を導く契機となる。薫が道心を抱くに至った動機については出生の秘密、おもに「柏木の犯し」に關わると論じられてきた。¹しかし、仮に出家が父母への最高の孝養であるとしても、²そうした観念は薫にとってはさして重い意味をなさない。なぜなら、薫の道心はその根幹に〈母〉の存在を根深く抱えているからである。³薫の道心に女三の宮の影響が濃く看取できることについては、長谷川政春⁴が女三の宮の尼姿と大君の喪服姿が薫に捉えられたことを重視し、かれにおいては「母親レベルと恋の相手とな

るべき女たちのレベルとの境界線が曖昧」であり、そのことが「母女三の宮から大君への雪崩式的移行」を導くと指摘しており首肯される。しかし、女三の宮と大君の連鎖を視覚的レベルからのみ理解するのでは、なお不足のように思われる。その動機には、女三の宮における母性性の欠如と同時に、女三の宮の〈母〉の非在が強く作用するからだ。本論は、長谷川の指摘をもとに、薫の道心―女三の宮―大君をつなぐ糸を分析することが目的である。女三の宮と薫親子における、両者の〈親〉の存在を鍵として、本考察はなされる。

一、〈女〉ではない〈母〉

出家とは、所屬社会に對して個人のセクシユアリティを放擲し、無性化した存在になることを宣言する行為である。それと同時に、女性にとっては以後家政全般に關与せず、夫婦關係と家族關係を解消することを宣言する意味があった。この指摘に従えば、女三の宮は出家によって光源氏との夫婦關係を解消したと同時に、薫との親子關係まで解消したという理解が成り立つ。これを出産直後に養育者としての義務を放棄した——つまり身を二つに分けた途端、子を捨てた——と解釈してもいいだろう。女三の宮が出産直後に「さはれ、このついでにも死なばや」(柏木三〇〇)と願ったことは、そうした推測を裏付ける。しかし、長じてこの親子關係は次のように語られる。

母宮は、今はただ御行ひを静かにしたまひて、月ごとの御念仏、年に二たびの御八講、をりをりの尊き御宮みばかりをしたまひて、つれづれにおはしませば、この君の出で入りましたまふを、かへりては親のやうに頼もしき蔭に思したれば、いとあはれにて、院にも内裏に

も召しまつはし、春宮も、次々の宮たちも、なつかしき御遊びがたきにてともなひたまへば、暇なく苦しういかで身を分けてしがなとおぼえたまひける。

(匂兵部卿一三)

傍線部のように、女三の宮は薫を「親のやうに頼もしき蔭」と頼ることから、親子關係が転倒していることがわかる。女三の宮については重ねて「幼し」、「小さし」、「片なり」、「いはけなし」、「若し」、「何心なし」、「あえかなり」などと評され、未熟な人物と語られてきたことがここに思い出される。〈父〉から〈夫〉へ、そして〈夫〉から〈父〉へと庇護者を変遷してきた女三の宮は、〈父〉亡きあとには〈子〉を庇護者とするのである。

女三の宮は夫・光源氏とは夫婦關係を築くことができなかった。また、柏木に通じながらもかれに對する愛情は認められず、柏木の死に際して「世にながかれとも思さざりしを、かくなむと聞きたまふはさすがにいとあはれなりかし」(柏木三一九)と語られるのみである。光源氏との夫婦關係も、柏木の熱情に巻きこまれた経緯も、女三の宮を〈女〉に変容させることはなかった。性を媒介にした男女關係の経験がそのまま〈女〉になることを指示しない。女

三の宮は朱雀院の〈娘〉から光源氏の〈妻〉となり、〈妻〉の立場から逃避して、薫の疑似〈娘〉の立場を選んだ。つまり、女三の宮にとって薫は疑似〈父〉である。女三の宮が薫を「親のやうに頼もしき蔭」と頼ることは、〈女〉の属性——姉妹・娘・妻・母——のうち、〈娘〉の立場こそが女三の宮にとって最も安んじられるものであることを示す。ここに言う〈娘〉の立場とは、男と関係を持たず、肉親から庇護される女を指す。

女三の宮が出産直後に出家を願ひ、五十日の祝には「かたちことなる御さま」(柏木 三二〇)であつたことを見ると、薫は俗体の〈母〉を知らないと言つてよい。尼である〈母〉が育児を含む家政に参与しないことは既述したが、同時に『源氏物語』が語られた時代社会に、女三の宮と薫の身分で、〈母〉がどれほど育児に関わるべきとされたかという点にも注意する必要があるだろう。しかし、そうした背景を考慮してもなお「御乳母たちは、やむごとなくめやすきかぎりあまたさぶらふ」(柏木 三三二)や「若君は、乳母のもとに寝たまへりける」(横笛 三四九)などとして、女三の宮が自ら養育に関わる様子は一度も語られないことは注目されてよい。

女三の宮と薫—〈母〉と〈女〉をつなぐ糸

薫には夕霧にとっての花散里のような身近で心安い母代がない。秋好中宮と姉にあたる明石中宮がかれの母代にあたると言えるが、身分上親しく付き合える相手ではない。また、光源氏と幼児期に死別した薫には〈父〉が非在である。そのため、おのずと母子関係が緊密になるかと考えられるが、「幼げ」な女三の宮を相手に果たせない。つまり、薫は自分に対して審判を与える〈父〉も、承認を与える〈母〉も持たず、周囲の誰とも強く結ばれてはいないのである。薫の独詠「おぼつかぬ誰に問はましいかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ」(匂兵部卿 二四)は、出生への懷疑と(親代も含めた)親族関係の希薄さを示す。こうした心情は次の一節にも表れている。

幼心地にほの聞きたまひしことの、をりをりいぶかしうおぼつかなく思ひわたれど、問ふべき人もなし。宮には、事のけしきにても知りけりと思されん、かたはらいいたき筋なれば、世ともの心にかけて、「いかなりけることには。何の契りにて、かう安からぬ思ひそひたる身にしもなり出でけん。善巧太子のわが身に問ひけん悟りをも得てしがな」とぞ独りこたれたまひける。

(匂兵部卿 二三)

ここには、薫が出生の経緯を幼少時から僅かに知っていたことがほのめかされる。しかし女三の宮に問うこともできず、宇治の八の宮家に仕える弁から柏木の遺文を譲渡されて真相を知り、真相をただすことを自ら戒める様子が語られる。なぜか。次の一節を見てみよう。

事にふれて、わが身につつがある心地するも、ただならずもの嘆かしくのみ思ひめぐらしつつ、宮もかく盛りの御容貌をやつしたまひて、何ばかりの御道心にてか、にはかにおもむきたまひけん、かく、思はずなりにける事の乱れに、かならずうしと思しなるふしありけん、人もまさに漏り出で知らじやは、なほつつむべき事の聞こえにより、我には気色を知らする人のなきなめり、と思ふ。

(匂兵部卿 二四)

〈父〉を問うことは、波線部「思はずなりにける事の乱れ」を問うことである。二重傍線部「宮もかく盛りの御容貌をやつしたまひて」仏に仕えるのは、ひとえに「事の乱れ」のせいであると薫は理解する。そして、そのことが傍線部「わが身につつがある心地」につながるのと認識を見ると、薫は女三の宮の出家（「社会的な死」）と自分の出生に因果関係を認めていたと考えてよい。ならば、不義の子である

という負い目のために苦悩を抱き、そうした心情が薫を道心志向に向けていると指摘するだけでは不十分だろう。

薫の苦悩には、不義の子の自覚に加え、他の男と通じて自分を産んだ女三の宮の罪も内包される。「同じうは後の世をだに」という薫の意志は、〈母〉との緊密な関係の志向に裏付けられているのである。こうした心情の伏線は、廻れば「宮のおはしまさむ世のかぎりは、朝夕に御目離れず御覽ぜられ、見えたてまつらん」(匂兵部卿 三一)という薫の思惟に読み取ることができる。また「三条宮の心細げにて、頼もしげなき身をひとつすがに思したるが避りがたき絆におぼえはべりて」(夢浮橋 三八)と、女三の宮のために身の進退を一存で決しようとはしないことも同様であろう。ではなぜ薫は常に女三の宮の意向を憚るのか。その理由は薫の〈父〉の非在に求められるだろう。

二、〈父〉の揺らぎ

薫の実父は柏木とされる。薫が柏木の子である最初の根拠は、柏木が猫の夢を見たことによる(若菜下 一二六)。幼少期の薫の容貌については、目もと、口もとが柏木に似

ていることが夕霧によって認められている（横笛 三六四）。他に、薫の〈父〉を柏木と思わせるくどりは、横笛の譲渡をめぐり、柏木が夕霧の夢枕に立つ場面（横笛 三六五）や、薫の琴の音が玉鬘によって頭中将と柏木に似ていると評される場面（竹河 七二）、または八の宮が薫の笛の音に藤家の流れを直感する場面（椎本 一七一）などがある。これらの語りは、「幼心地にほの聞きたまひしこと」（匂兵部卿 一二三）の変奏として、薫が柏木の子であることを読み手に裏付け、了解させるものである。

しかしこれらの語りが読み手に〈父Ⅱ柏木〉を理解させても、道心を志向した時点における薫の〈父〉への認識は、不特定の他者／光源氏の間で揺らきがある。ならば、〈父〉の存在が不離実である以上、薫は〈母〉の子であることに重点を置いて生きるほかない。仮に光源氏の子ではないことが世間に周知されたとしても、薫が女三の宮の子であることは揺るぎない事実だからだ。

朱雀帝に中宮はおらず、后腹の皇女は存在しない。よって朱雀朝における至尊の皇女は女御腹の女三の宮と考えてよい。女三の宮は今上帝の異腹のきょうだいである。今上帝の女三の宮への扱いの重々しさは、「二品になりたまひ

て、御封などまざる、いよいよはなやかに御勢ひ添ふ」（若菜下 一七七）、または「かく世を背きたまへれど、衰へず、何ごともとのままにて、奏せさせたまふことなどは、かならず聞こしめし入れ、御用意深かりけり」（宿木 四七七）などと語られている。このことから、〈父〉非在の薫にとって、〈母〉がいかに重要な後ろ盾となっているかがうかがえる。

女三の宮が薫を親とも恃むとは言え、対社会的には、薫こそが女三の宮の威勢によって厚遇されている。このことに薫が自覚的であることは、今上帝の女一の宮について「わが母宮も劣りたまふべき人かは、后腹と聞こゆばかりの隔てこそあれ、帝々の思しかしづきたるさま、異事ならざりける」（蜻蛉 二七二）と思うくどりに裏付けられる。〈父〉非在の薫は、〈母〉の身分によってこそ、その立場が支えられているのである。また、女二の宮の降嫁にあたり、「后腹におはせばしも」（宿木 三七九）と思うくどりも同様であろう。この思惟は語り手に「あまりおほけなかりける」（同）と批判されているが、〈母〉の血脈への自負Ⅱ自身の社会的立場の基盤の自覚こそが、薫にこのような言葉を選ばせるのである。

もちろん、薫の厚遇が女三の宮にのみ依拠すると指摘することは適切ではない。薫が光源氏の子とされるからこそ冷泉院の後見を得ていることは、次のくだりにも明らかである。

院の聞こえつけたまへりしまでに、冷泉院の帝とりわきて思ひかしづき、後の宮も、皇子たちなどおはせず心細う思さるるままに、うれしき御後見にまめやかに頼みきこえたまへり。
(匂兵部卿 二二―二三)

傍線部の「院」は光源氏を指す。冷泉院の厚遇が光源氏の遺志に基づくことがここには示される。しかし、薫にとって〈父〉が不特定の他者／光源氏の間で揺らぎ、かつ定めがたいものだとなれば、確実な血脈の〈母〉こそが、非在の〈父〉よりもなお強く薫の社会的立場を支え、かつ個人的な志向に動機を与えていることを強調しておく。

また、薫の今上帝女一の宮への思慕が折々語られるが、この思慕の動機を既述の経緯に照らせば、いかなる理解が可能であろうか。先々帝の至尊の皇女を〈母〉に持つ薫が、今上帝の後腹女一の宮を思慕することは、血の尊貴性において〈母〉を越える〈女〉を求めることを意味する。つまり、薫の女一の宮思慕は、〈母〉からの自立、あるいは

〈母〉との分離を（意識的ではないにせよ）志向した行為であったと考えることができる。

また、薫が中君を垣間見、「女一の宮もかうざまにぞおはすべき」（椎本 二一七―二一八）として〈中君↓女一の宮〉を連想するが、その折の中君の姿は喪服に掛け帯、そして「数珠ひき隠して持たまへり」（椎本 二二七）というものであった。これ以前、薫が目にした女三の宮の姿は「経読みたまふを、恥らひてもて隠したまへり」（橘姫 一六六）と語られており、喪服と尼姿の「鈍色の衣装」、さらに数珠と経という「仏具を隠し持つ」点において、中君と女三の宮の印象は重なり合う。つまり、「法」を媒介にしてなされる〈中君↓女一の宮↓女三の宮〉の連想が成り立つのである。

また、蜻蛉巻において女一の宮思慕が語られるのは、「蓮の花の盛り」（蜻蛉 二四七）に御八講を催した場面であった。「法」の場面において女一の宮を垣間見たことは偶然ではあるものの、ここに「御八講」という「法」の媒介が有効に機能していることは注目されてよい。薫の女一の宮思慕は、柏木物語の反復であるとの指摘や、あるいは薫の世俗性を示すものとの解釈があるが、本論では右の考

察を踏まえ、これを〈母〉に囚われながらもなお〈母〉を越えようとする意志により発動し、かつ支えられるものであることを指摘したい。

さて、薫は柏木が〈父〉であることを橋姫巻で知るが、そのことが薫の心内に動揺あるいは葛藤を生じさせたことは物語に見出せない。むしろ、〈父〉が柏木と確定したことで、以後この問題は求心力を失う。柏木の遺文を見た直後、女三の宮を訪ねた薫は「何かは、知りにつけりとも知られたてまつらんなど、心に籠めてよろづに思ひたまへり」(橋姫 一六六)と、女三の宮をいたわる様子が語られる。〈母〉の過去を知っても、薫は譴責せず、母子関係を安定的に保つことを優先する。「父とは自明のものではなく、母親だけが知っているものであり、母子関係とは社会の最小単位である」との小倉千加子の指摘に従えば、確実な血脈である〈母〉の子として生きる決意が薫を支え、かつ生かすことがこの場面からは理解できるだろう。

では、薫の生の基盤である女三の宮とは、いかなる〈母〉であったのか。

三、〈女源氏〉と八の宮の相似

女三の宮を形容する言葉で最も多く用いられるのは「幼げ」である。最後まで成熟した女として語られることの無かった女三の宮は、周囲から〈母〉としての能力にも疑問を抱かれており、玉鬘に「母宮のしどけなう生ほしたてたまへれど、なほ人にはまさるべきにこそはあめれ」(竹河七四)と語らせている。物語に登場した当初から繰り返し「幼げ」であることが強調されてきた女三の宮は、養育に関与する程度の差は措いても、〈母〉としては周囲に不安を抱かせる人物であったと思われる。

女三の宮の幼さについて考えるとき、重要となるのは女三の宮とその母・藤壺女御の関係である。女三の宮の母・藤壺女御について、若菜巻上に次のように語られる。

藤壺と聞こえしは、先帝の源氏にぞおはしましける、まだ坊と聞こえさせしとき参りたまひて、高き位にも定まりたまふべかりし人の、とりたてたる御後見もおはせず、母方もその筋となくものはかなき更衣腹にて、ものしたまひければ、御まじらひのほども心細げにて、

大后の、尚侍を参らせたてまつりたまひて、かたはらに並ぶ人なくもてなしきこえたまひなどせしほどに、氣おされて、帝も御心の中にいとほしきものには思ひきこえたまひながら、おりさせたまひにしかば、かひなく口惜しくて、世の中を恨みたるやうにて亡せたまひにし、その御腹の女三の宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきものに思ひかしづききこえたまふ。

(若菜上 一七〜一八)

死別した母・藤壺女御は帝寵を被ることができず、傍線部「世の中を恨みたるやうに」死んだという。逝去時の年齢には触れられていないが、女三の宮の降嫁直前のこととされる。少女が成女になる過程に〈母〉が非在であったことは、女三の宮が〈母〉となった時にその影響を顕わす。なぜなら、〈娘〉が〈母〉となった時、〈娘〉には反復と模倣の対象となるべき〈母〉が存在しないからだ。このことがひいては女三の宮を母性性の欠如へと導くのである。久保田孝夫は女三の宮に使用される「片生ひ」、「片なり」の評価を分析し、両表現が幼くして母親と死別・離別した人物にだけ使用される表現であることを導いた。この指摘に従えば、女三の宮に向けられた「片生ひ」、「片なり」の評価

は、女性性の未熟を指すと同時に、〈母〉となつては母性性にも欠ける人物になることを予告する表現であると言える。朱雀院が二重傍線部「女三の宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきものに思ひかしづき」したことが女三の宮の成熟を妨げた唯一の原因ではない。そうではなく、女三の宮における〈母〉の非在こそが、長じては彼女に〈母〉となることを妨げ、さらにはその役割を果たさせることをも妨げたと考えるのである。

さて、女三の宮の母・藤壺女御は「世の中を恨みたるやうに」死んだとあった。藤壺女御の「恨み」とは、女三の宮の父・朱雀院との関係に起因する。藤壺女御は母方が更衣腹で後見もなく、弘徽殿大后側の勢力を後盾とする臘月夜に圧倒され続けて死んだとされる、いわば後宮政治の犠牲者であった。このような〈母〉を持つ点において、長谷川政春は女三の宮の物語を光源氏の相似であると論じ、子に注がれる父帝のまなざしまでもが同質であるとして、女三の宮の物語を〈女源氏の物語〉と認定することは首肯される。

だが、〈男源氏〉の物語が苦難を越えて栄華に至るものであるのに対して、〈女源氏〉の物語にはいかなる栄華も

栄達も予測されない。《男源氏》の場合は、「そねみたまふ人うちそひ、母方の御後見などありし」（匂兵部卿二五）という環境が、自立の要件として物語を突き動かす原動力となった。しかし、《男源氏》物語の反復は、《女源氏》にも、そして《女源氏》の子・薫にもなされることはない。なぜなら、《女源氏》の物語には、いかなる自立の要件も動機も与えられていないからだ。そのことは、《女源氏》の子、薫にも影響する。《女源氏》の安定した地位によって、薫には家門を立てる要もなく、生まれたときからすでに万事において恵まれた状況にあった。つまり薫は、《母》の身分が至尊であることによってすでに人生が定められ、さらには《父》の非在によって、《母》の射程から逸脱することが禁止されているのである。そのことは「内裏にも、母宮の御方さまの御心寄せ深くて、いとあはれなるものと思され」（同）と、薫の厚遇が女三の宮の存在に支えられたものであるとの語りに裏付けられるだろう。

さらに重要なことは、薫の《母》が原初の記憶からすでに尼姿であったという点にある。

中将は、世の中を深くあちきなきものに思ひすましたる心なれば、なかなか心とどめて、行き離れがたき思

女三の宮と薫―《母》と《女》をつなぐ糸

ひや残らむなど思ふに、わづらはしき思ひあらむあたりにかかづらはんはつつましくなど思ひ棄てたまふ。さしあたりて、心にしむべきことのなきほど、さかしだつにやありけむ。人のゆるしなからんことなどは、まして思ひよるべくもあらず。十九になりたまふ年、三位宰相にて、なほ中将も離れず。帝、後の御もてなしに、ただ人にては憚りなきめでたき人のおぼえにてものしたまへど、心の中には、身を思ひ知る方ありて、ものあはれになどもありければ、心にまかせてはやりかなるすき事をさをさ好まず、よろづのこともてしづめつつ、おのづからおよすけたる心ざまを人にも知られたまへり。

（匂兵部卿二九―三〇）

ここでは、「わが身につつがある心地」を感じている薫が「身を思ひ知る方」から社会に距離を置くことが語られる。先述したように、薫の記憶の原初にある女三の宮が尼姿であったことを考えれば、薫が道心を抱く根本的な動機に《母》への慕情を見ることが容易である。幼児期の薫を抱くしぐさも語られず、《母》としての存在感を示さない女三の宮と薫を結ぶものは、仏道に他ならない。薫の道心とは、社会の最小単位である母子関係を維持するために要

請された手段といえよう。

では、なぜ薫は宇治の八の宮、そして大君と関係を結ぶことになったのだろうか。次節ではその問題を考察する。

四、宇治の八の宮、そして大君へ

薫は宇治の八の宮と交誼を結ぶことになるのだが、薫が法の師として八の宮を慕う理由は、次のくだりに認められる。

聖だつ人才ある法師などは世に多かれど、あまりこはごはしう遠げなる宿徳の僧都、僧正の際は、世に暇なくきすくにて、ものの心を問ひあらわさんもことごとしくおぼえたまふ、またその人ならぬ仏の御弟子の、忌むことを保つばかりの尊さはあれど、けはひいやく言葉たみて、こちなげにもの馴れたる、いとものしくて、昼は公事に暇なくなどしつゝ、しめやかなる宵のほど、け遠き枕上などに召し入れ語らひたまふにも、いとさすがにものむつかしうなどのみあるを、いとあてに心苦しきさまして、のたまひ出づる言の葉も、同じ仏の御教へをも、耳近きたとひにひきませ、いとこ

よなく深き御悟りにはあらねど、よき人にはものの心を得たまふ方のいとことにものしたまひければ、やうやう見馴れたてまつりたまふたびごとに、常に見たてまつらまほしうて、暇なくなどしてほど経る時は恋しくおぼえたまふ。
(橋姫 一三四)

ここには僧侶らが薫の意に適わないことが語られる。これは薫の道心が出家と解脱を目的としたものではないことを読み手に了解させるが、先ほどまでの考察で辿つたように、薫の道心が根源に〈母〉への慕情を抱えることを理解すれば、八の宮思慕が「在家の分離者」〈母〉の相似形の希求に通じることが理解される。よって、「こはごはしう遠げなる」という男性性が全面に打ち出された僧侶を拒み、「あてにおほどかなる女のやう」(橋姫 一二四)と評され、女性性を強く感じさせる八の宮に惹かれることは不自然ではない。

女三の宮の父・朱雀院の死は宿木卷(四七七)に語られるが、逝去の年齢などは不明である。しかし、仮に薫が幼少期に祖父の姿を見ていたとすれば、薫の認識には女三の宮が最も持みとし、かつ慕う人物が〈父〉僧と刻まれたと考えることができる。となれば、薫を親のように恃む

《母》に対し、薫に要求される役割は《父Ⅱ僧》となる。つまり、薫の道心は女三の宮の疑似《父》となるべく志向されたものとも言えるのである。そして、《母の父（祖父）Ⅱ僧》の模倣への志向が、長じては薫と八の宮を結びつけたと考えるのだ。^①《母》の《父》を模倣するために志向された仏道において、その具体的な手本、あるいは目指すべき《母》の《父》を投影しうる人物として、八の宮は要請されたのである。

こうした経緯から形成された薫の道心は、大君に対する思慕の基底をなすものでもあった。女三の宮と大君の存在が薫において混同されていたことは、長谷川政春によって指摘されている。たしかに、薫が大君を「児めかし」（橘姫 一五二）と認識する箇所は、かつて女三の宮が「うつくしき子どもの心地」（柏木 三二一）、「ただ児のやうに見えたまひて」（横笛 三四八）と評されたことを思い出させる。

両者の人物造型を精緻にたどると、決して同質とも近似性があるとも言えないが、二度目の垣間見の際、薫の視線に捉えられた大君が、女三の宮とイメージにおいて重なり合い、「個体を離れて響き合うものがある」という長谷川

の指摘は重要である。これに従って文脈を遡れば、幼さが常に強調される女三の宮と、世なれぬ「児」のようであるという最初の大君への印象、そして「経」を持つ女三の宮と、喪に服す大君の姿が薫の目に重なりをもって映ったという経緯が相互に作用して、薫に大君への思慕を促したという理解は成り立つ。それは、薫の心内に燦る《母》なるものへの思慕と、《母》の代理を求める心情が、現実の世界の中ではじめてそれを投影する対象を得たという意味に繋がる。薫にとって大君は、かれが一度も目にしたことのない、俗体の《母》の姿を重ねることを可能にする人であったということだ。

大君に思慕を抱く薫は、弁に対して自らの境遇を次のように語る。

「世の中のなよびかなる筋にもあらずや。ただかやうに物隔てて、言残いたるさまならず、さしむかひて、とにかくに定めなき世の物語を隔てなく聞こえて、つみたまふ御心の隈残らずもてなしたまはむらん、はらかななどのさやうに睦ましきほどなるもなく、いとさうざうしくなん、世の中の思ふことの、あはれにも、をかしくも、愁はしくも、時につけたるありさま

を、心にこめてのみ過ぐる身なれば、さすがにたづきなくおぼゆるに、疎かるまじく頼みきこゆる。後の宮はた、馴れ馴れしく、さやうに、そこはかとなき思ひのままなるくだかしさを聞こえふるべきにもあらず。三条宮は、親と思ひきこゆるべきにもあらぬ御若々しさなれど、限りあれば、たやすく馴れきこえさせずかし。そのほかの女は、すていと疎く、つましく恐ろしくおぼえて、心からよるべなく心細きなり」

(総角 二三〇—二三二)

「後の宮」(明石中宮)や「三条の宮」(女三の宮)などはいずれも近づき難く、また波線部「そのほかの女は、すていと疎く、つましく恐ろしくおぼえて、心からよるべなく心細」いとする。薫を後見する秋好中宮は、少なからず「母」の位置に立ちうる人物であったが、更に年の離れた姉・明石中宮、そして母・女三の宮などの「母的存在」が複数に及ぶ薫は、そのいづれとも親密な関係を築くことができなかったと語られる。

ここで留意したいのは、薫が大君を恋慕しはじめたのが柏木の遺文を読んだ直後という事実である。薫の記憶の原初にある女三の宮は、尼という無性の存在であり、〈母〉

の立場にはあるが、〈女〉ではなかった。だが、女三の宮が密通によって薫を産んだ事実が柏木の遺文によって明らかになった時、薫は「事の乱れ」(匂兵部卿二四)の真相を知る。これは〈母〉が〈女〉であることを〈子〉に突きつける意味を持つだろう。これによって〈母〉を慕う情と、〈女〉としての女三の宮に軋轢が生じた時、その相剋から薫を唯一救い得たのが、女三の宮と「イメージにおいて重なり」^⑩あった大君ではなかったか。

では、右の経緯を薫の大君思慕の発露と認定したとき、なぜ大君に拒否され続けてもなお薫は大君に執着するのかわという問いも浮かぶ。その理由には、度重なる薫の求愛を最後まで拒み通したことによって、大君が「世の常の女」ではなかったと証されたことが挙げられよう。これによって大君は薫の〈母〉なるもののへの渴望を満たし、あるいは賸い、カタルシスを与えたと考えられるからだ。大君が薫の求愛を拒否した理由については別稿に詳述したが、大君が薫の求愛を拒否し、死に至るまでそれを貰ったことは、薫の恋の動機にとっては幸いであった。

おわりに

大君を失い、仏道に精進する薫に、女三の宮は次のように語りかける。

「幾世しもあらじを、見たてまつらむほどは、なほかひあるさまにて見えたまへ。世の中を思ひ棄てたまはんをも、かかるかたちにては、妨げきこゆべきにもあらぬを、この世の言ふかひなき心地すべき心まどひに、いとど罪や得んとおほゆる」とのたまふが、かたじけなくいとほしくて、よろづを思ひ消ちつつ、御前にてはもの思ひなきさまをつくりたまふ。(宿木 四〇〇)繰り返すが、薫の道心は、〈母〉恋に起因し、〈母〉との融和を可能にする唯一の接点として、または〈母〉の〈父〉を模倣するために要請された現実的な手段であった。しかし、女三の宮はその場——道心——に薫が加わることを拒否する。それは女三の宮に倣うべき〈母〉が非在であること、また女三の宮があくまで〈娘〉として庇護されることを志向する〈女〉であることに要諦がある。

道心を共有し、融和を求める〈子〉と、それを拒む〈母〉

女三の宮と薫——〈母〉と〈女〉をつなぐ糸

の関係は、〈母〉の「幼さ」ゆえに和解を得ない。だが〈母〉は〈子〉の志向と生、そして俗世に抱く憂悶の根底に常に強く影響し続ける。その影響力を〈子〉は「避りがたき絆」(夢浮橋 三八一)と呼ぶ。〈子〉の〈母〉に対する憂悶は、生涯晴らされることはない。そしてそれは、〈子〉が他の〈女〉に〈母〉への欲求を転化することで、新たな物語を創造してゆくのである。

註

(1) 伊藤博「愛執の薫」(『源氏物語の基底と創造』武蔵野書院、一九九四年)は「隠れた 父の影が薫の生をことさらに支配し続ける」と指摘。また三枝秀彰は「薫試論」(『王朝物語研究会編『研究講座 源氏物語の視界5』新典社、一九九七年)で柏木の生が薫に「自己抑制せざるをえない精神構造」を構成したとする。

(2) 山崎誠「仏教的「孝」の観念」(『中古文学』一四、一九七四年十月)は母の存在のために出家を思い留まる薫について、「仏典の記述に則せば出家は孝の至であって、孝養と出家は矛盾しない。煩悶の挙句出家を遂げないのは明らかに撞着である」とする。

(3) 吉井美弥子「薫と〈女三の宮〉」(『読む源氏物語 読まれる源氏物語』森話社、二〇〇八年)は、薫の道心と宇治行きの動機、さらに薫が宇治に引きとめられざるをえなくなっ

た状況の要因に女三の宮が潜んでいることを論じる。

- (4) 長谷川政春「恋を拒む女」(『物語史の風景』若草書房、一九九七年)

- (5) 勝浦令子『古代・中世の女性と仏教』(山川出版社、二〇〇三年)は、十世紀末頃の出 家女性の生活について、出家後は家政全般から手を引き、出家に伴い夫との婚姻関係も 解消されたと指摘している。

- (6) 本論における〈母〉とは、自ら授乳を含む養育を担う「母」を指示しない。乳母という「乳房の母」(木村朗子『乳房は誰のものか』新曜社、二〇〇九年)が主に養育を担い、存在感を発揮していたことは、幼少期の薫が乳母とともに語られることから察せられる。本論における〈母〉は、養育に参与する比重を問わない。子を支え・支配し・子の頼りとされるべき(例えば明石中宮のような)存在、役割を負う女親を〈母〉とする。

- (7) 土居奈生子「第三部における女三の宮―〈大宮〉たる明石中宮と女二の宮の降嫁―」(『人物で読む『源氏物語』一五、勉強出版、二〇〇六年)にも女三の宮が「育兒に携わる様子が語られない」と指摘する。

- (8) 薫の道心の発露を論じる際にそれが出生の秘密に由来すると指摘する論に、森一郎「薫の道心と恋」(『源氏物語作中人物論』笠間叢書、一九七九年)、後藤祥子「不義の子の視点」(『源氏物語の史的空間』東京大学出版会、一九八六年)、池田和臣「薫の人間造型」(『源氏物語の探究』一

五、風間書房、一九九〇年)、松木典子「『源氏物語』薫の道心について」(『平安朝文学研究』復刊第八号、一九九一年一月)などがある。

- (9) 『岷江入楚』は「獣を夢見るは懐胎の相也」と注記を施す。猫の夢が懐妊の驗となることは理由不明とされ、俗信かとされているが、論者は「ねこ」が「子子」とあて字でできることに拠るか推測する。高橋亨「源氏物語の内なる文学史」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会、一九八二年)は「猫」に「寝子」の連想を提案している。

- (10) 朱雀帝の女一の宮、女四の宮の母については物語に語られていないため不明とする。女二の宮(落葉の宮)は母(一条御息所)が更衣であるため、女三の宮には及ばないことは自明である。女三の宮の母・藤壺女御は先帝の皇女として生まれ、臣籍降下して源氏となった。よって女三の宮の祖父は先帝となる。女一の宮と女四の宮の母が藤壺女御以上の身分であった可能性については、藤壺女御を語る中で「高き位にも定まりたまふべかりし人」(若菜上一七)とされていることを根拠に希薄であらうと考える。

- (11) 註(1) 前掲論文

- (12) 鈴木日出男「栄華と憂愁―薫論(4)」(『講座 源氏物語の世界』八、有斐閣、一九八三年)は、薫の女一の宮恋慕を「血の求めるしたかなまでの権勢志向」と読む。日向一雅「柏木の遺文」(『源氏物語の王権と流離』新典社、一九八九年)は、薫の道心と恋着の矛盾を「迷妄」と指摘。

同様の論に三枝秀彰「罪の人々」(王朝物語研究会編『論集 源氏物語とその前後』2、新典社、一九九一年)、山田利博「負性を帯びた主人公として」(『源氏物語の構造研究』新典社、二〇〇四年)など多数。

- (13) 小倉千加子・中村うさぎ『幸福論』(岩波書房、二〇〇六年)

- (14) 女三宮の幼さについては武者小路辰子「女三宮像」(『源氏物語 生と死と』武蔵野書院、一九八八年)、註(12)山田前掲書「負性を帯びた主人公・女三の宮」、池田節子「女三宮造型の諸問題」(『源氏物語表現論』風間書房、二〇〇〇年)、柳町時敏「柏木と女三宮」(『常葉国文』二七、二〇〇三年三月)など多数。

- (15) 久保田孝夫「さして重き罪には当たるべきならねど」女三宮の片成り・柏木の罪意識・光源氏の睨み」(『国文学』「テクストツアー 源氏物語ファイル」四五・九、二〇〇〇年七月)

- (16) 長谷川政春「女源氏の恋ー女三の宮」(『物語史の風景』若草書房、一九九七年)

- (17) 西原志保『源氏物語』女三宮の自己意識」(『日本文学』

五八一・九、二〇〇九年九月)は「男女関係から離脱することとが父との結びつきを取り戻させている」として女三宮における父・朱雀院の役割の重要性を指摘する。

- (18) 註(4) 長谷川前掲論文。また長谷川の指摘を継承し、発展させる形で「はらから」を鍵語に有馬義貴「『源氏物語』「宇治十帖」の「はらから」」(『日本文学』五八一・二、二〇〇九年十二月)も同様の指摘をしている。

- (19) 註(4) 長谷川前掲論文は、橘姫巻と椎本巻の巻末の場面と薫が女三宮に対面した時と大君をかいま見た時に薫の視線に捉えられた両者の姿が「イメージにおいて重なる」と指摘する。また長谷川はこうした薫の心情に「〈近親相姦〉の胎動」を読み取る。

- (20) 櫻井清華「不婚の戦術ー父の娘としての『源氏物語』宇治の大君」(『日本文学』五八一・四、二〇〇九年四月)

『源氏物語』の引用本文はすべて『新編日本古典文学全集』(小学館)による。

(本学及び摂南大学非常勤講師)